

「学校と社会をつなぐ調査」
2時点目成果報告書(ダイジェスト版)

2016年9月
京都大学高等教育研究開発推進センター
学校法人 河合塾

はじめに

この報告書は、京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾教育イノベーション本部が共催して、2013年度より実施してきた「学校と社会をつなぐ調査」（通称：10年トランジション調査）の2時点目の成果報告書（ダイジェスト版）です。当時高校2年生だった生徒はいま大学2年生（現役合格者）になっています。本報告書は、彼らが高校2年生から大学受験を経て大学1年生になり、いったいどの程度変化したのか、高校（2年）生の姿は大学1年生の姿にどの程度影響を及ぼすのかを明らかにしたものです。

本報告書の結果を大きく2点にまとめると、次のようになります。

- 高校2年生の半数は、さほど資質・能力を変化させることなく大学生になる。
- 高校2年時の家庭学習や対人関係・コミュニケーション、キャリア意識が、大学1年時の資質・能力を含め、さまざまな側面における学習に影響を及ぼす。

2点目の「家庭学習」「対人関係・コミュニケーション」「キャリア意識」は、学び成長する高校（2年）生の特徴として示唆されたものでした（『どんな高校生が大学、社会で成長するのか』学事出版、2015を参照）。それが高校（2年）生にとどまらず、大学（1年）生の学びと成長に大きく影響を及ぼすことを示唆したのが、今回の成果のポイントです。高校生の姿と大学生の姿を縦断的に繋いだ調査研究は皆無に等しく、昨今の高大接続、学校から仕事・社会への移行（以下「トランジション」）の改革のなかで貴重な資料になるはずですが、もちろん、今回の成果だけで見方を定めてしまうのではなく、今後、他の項目や他の観点から、他のサンプルを継続的に収集して、本調査の結果を検証・修正し続けていくことは言うまでもありません。

政府の施策との関連で見ると、1時点目の成果報告をした2014年7～9月には、まだ「アクティブ・ラーニング」をはじめとする学習指導要領改訂に向けての諮問（2014年11月）、大学入試改革をはじめとする『高大接続答申』（2014年12月）は出されておらず、高大接続システム改革会議（2015年3月～）も始まっていませんでした。本研究が背景に持つ高大接続やトランジションの改革は、当時意識の高い一部の高校の関心事にしか過ぎませんでした。

大学生の学びと成長のデータを大規模に収集してきた経験から、講演やシンポジウム、フォーラムの機会に、高校の先生方に、高校生に学習だけでなく、対人関係やコミュニケーション、キャリア意識を併せて育ててほしいと何度も説いてきました。そうでないと、大学生になって彼らは学ばないし成長しないからです。いくら勉強ができて、いくら良い大学に入っても、大学で学び成長する気がないならば、彼らは何のために大学へ進学するのでしょうか。良い大学へ入れば将来安泰という時代はもうとっくに終わっていることを知らないわけではあるまいし。

大学がいくら頑張って教育改革を進めても、関わってこない学生を育てることは不可能です。とくに大半の総合大学では、担任もいない、学生の顔と名前もわからないなかで教育をせざるを得ません。この状況下で、対人関係の弱い学生は、選択の演習科目やプロジェクト型の授業を履修してきません。今で言うところのアクティブラーニングや実験においても、他の学生と積極的に作業をしません。キャリア意識の弱い学生は、クラブサークル、アルバイトといった目先の楽しさに溺れ、将来に向けて自分を少しでも高める活動に従事しません。そして、なによりそうした学生たちが単に学習を積極的にしないだけにとどまらず、いま施策で叫ばれる資質・能力も十分身につけていないというデータも蓄積されてきています。こういう話を高校の先生方にしてきました。ところが、高校の多くの先生方は、「話はわかるけど、大学受験が変わらないと」と金科玉条のごとく、それを持ち出して耳を貸しませんでした。

「大学受験がそんなに大事で、生徒の将来の大人に向けての成長が二の次になるのなら、その高校は〇〇予備校と名前を変えたらいいんじゃないですか。先生方は何のために教師になったのですか。」と

嫌みも言ってきましたが、そんな私の嫌み程度で変わる現場ではありませんでした。

大学生になって学びと成長の弱い、資質・能力の弱い学生が、卒業後仕事をできるようになって、社会生活を過ごすようになって、力強くやっつけていけるのでしょうか。これに対するデータはまだ十分にはありませんが、これを却下するデータは1つあります（中原淳・溝上慎一編『活躍する組織人の探究』東京大学出版会、2014年）。しかし、振り返り調査なので決定的ではありません。この10年トランジション調査を続けて、この見方をしっかり検証したいと考えています。

今は政府の施策が力強く進んでいます。課題は多いですが、新しい時代に向けての学校教育の大きな方向転換を目指しています。大学入試も変えようとしています。大学側もすでに対応を始めています。このようななか、「大学受験が変わらないと・・・」と言っていた高校も、重い腰を上げ始めました。まずは、講義一辺倒の授業を脱却してアクティブラーニング型授業への転換、教科と総合的な学習、キャリア教育、課外の活動を有機的に繋いで〇〇教育を充実させていくこと、カリキュラム・マネジメントをはかっていくことです。2年前あるいはそれ以前の腰が重かった高校群の変わりようには目を見張るものがあり、私が政府の推進力に頭が下がる思いを何度もしてきたのは、容易に想像できるでしょう。

本報告書は、このようななか、高校生までの間にしっかり人生を力強く生きていく基礎・基本を育てておく、少なくとも育てようと努力することが、小学校・中学校まで含めた初等・中等教育においてどれほど重要なことかをデータで示すものです。半数は変わらないと言っても、残り半数は変わります。また、大学がこの現実を受け止めて、もっと一人ひとりを育てる教育や指導をするようになれば、もっと多くの学生が変わるでしょう。本報告書が、日本の高大接続、トランジションの改革を推進する基礎資料の一つになればとこころから願います。

最後に、高校2年時より継続して参加してくれている学生のみなさま、ご協力いただいた全国の教育委員会、約400校の高校関係者、さまざまなかたちで本プロジェクトを応援してくれる方々へ感謝の意を申し上げます。

2016年9月 京都大学教授 溝上 慎一

この報告書で示す主な結果

- 資質・能力は、高校2年時から大学1年時にかけて変化しない者が47～60%見られた。成長した者はわずか23～24%に過ぎなかった。（☞分析4-1を参照）
- 大学1年時の資質・能力の維持あるいは発達に、大学1年時に「主体的な学習態度」が影響を及ぼしている。（☞分析1、分析4-2を参照）
- 大学1年時の資質・能力の発達をはじめ、学びと成長を促進する「主体的な学習態度」は、高校2年時のキャリア意識、ひいては大学1年時の二つのライフに影響を受けていた。この結果は、大学生の学びと成長が、高校生時のキャリア意識を大学生になって持続・発展させ、それに影響を受けて促されることを示唆している。（☞分析4-2を参照）
- 資質・能力や学習等は、学習や行動、経験等の個人的要因により大きく説明されていた。しかしながら、大きくはないながらも、各変数はとくにジェンダーや入学する大学の偏差値、学部学科などの属性変数にある程度影響を受けていた。（☞分析1～3を参照）
- 大学偏差値の高い学生の授業外学習時間は長かったが、資質・能力の一部やアクティブラーニング、キャリア形成などの昨今の施策に関わる変数は、偏差値の低い学生のほうが得点が高かった。
- 高校2年時の生徒タイプが概して、大学1年時の資質・能力、学習、キャリア形成に大きな影響を及ぼしていた。生徒タイプは、高校2年時の資質・能力のもととなる活動・態度変数から成り立っており、高校の教育実践の参考になると考えられてきたものである。（☞分析5を参照）
- その他詳細は各分析ページをご覧ください。

目次

目次

• 調査概要	5
• これまでの調査と分析対象者について	5
• 分析1 資質・能力について	6
分析1-1 大学1年時の他者理解力	
分析1-2 大学1年時の社会文化探究心	
分析1-3 大学1年時の計画実行力	
分析1-4 大学1年時のコミュニケーション・リーダーシップ力	
• 分析2 学習について	11
分析2-1 大学1年時の成績	
分析2-2 大学1年時の授業外学習時間	
分析2-3 大学1年時のアクティブラーニング外化	
分析2-4 大学1年時の主体的な学習態度	
• 分析3 キャリア形成について	16
分析3 大学1年時の二つのライフ	
• 分析4 まとめの分析	18
分析4-1 高校2年時(T1)から大学1年時(T2)にかけて資質・能力はどれだけ変化するか？	
分析4-2 総合的に見て、資質・能力(T2)、学習(T2)を説明する変数は結局どれか？	
• 分析5 高校2年時の生徒タイプ(T1)との関連	21
分析5-1 生徒タイプ(T1)×資質・能力(T2)	
分析5-2 生徒タイプ(T1)×学習(T2)	
分析5-3 生徒タイプ(T1)×キャリア形成(T2)	
付録 使用変数の説明	25

調査概要

京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾は、2013年から高校2年生(全国約400校、4.5万人が参加)の学習や学校生活、キャリア形成等を通しての成長を、大学生・社会人へと約10年間追跡調査する「学校と社会をつなぐ調査」を推進しております。1時点目の詳しい報告は、下記の本にまとめられています。



溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2015).
どんな高校生が大学、社会で成長するのかー「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプー 学事出版

高校2年生だった参加者が大学生になり、2時点目の調査(2015年11-12月)が実施がされました。ここでは、高大接続改革、次期学習指導要領のポイントとされる資質・能力の育成や大学生の学習に焦点を当てて、主な結果を示します。

これまでの調査と分析対象者について

● 1時点目調査(高校2年時:T1):

2013年10~12月実施。全国計378校の高校2年生45,311名(男性21,238名、女性22,588名、不明1,485名)が教室で、あるいはインターネットで調査票に回答。メールアドレスをウェブ上で登録し、継続調査を承諾した者16,829名(回答者の37.1%)が、以後の継続調査の対象者となる。

● 1.5時点目調査(大学1年時:T1.5):

2015年4月末にウェブ上で実施。7,420名(男性2,951名、女性4,469名。継続調査を承諾した者の44.1%)が回答。調査内容は、1時点目で尋ねられなかった項目(高校在籍時の居住都市、親の職業や学歴、年収等の社会階層情報)や卒業後の進路・就職状況など。

● 2時点目調査(大学1年時:T2):

2015年11-12月にウェブ上で実施。5,939名(継続調査を承諾した者の35.3%)が回答。そのうち、4年制(あるいは6年制)大学へ進学した者4,751名を本分析の対象とした。ただし、同一数字を続けて回答するなどいい加減だと見なされる回答者74名を除き、4,677名(男性1,792名、女性2,850名、回答拒否等その他35名)を分析対象者とした。

表1 2時点目回答者の進学・就職状況 度数(%)

4年制(あるいは6年制)大学へ進学	4,751 (80.0)
短期大学へ進学	85 (1.4)
専門学校へ進学	157 (2.6)
浪人している	892 (15.0)
就職・仕事をしている(アルバイトを含む)	43 (0.7)
何もしていない	2 (0.0)
その他	9 (0.2)
計	5,939 (100.0)

表2 2時点目分析対象者の専門分野 度数(%)

1 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)	1,011 (21.6)
2 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)	962 (20.6)
3 理科系(理学・工学・農学など)	1,292 (27.6)
4 芸術系(美術・音楽・デザイン学など)	98 (2.1)
5 1~4以外の文科系でもあり理科系でもある	192 (4.1)
6 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)	439 (9.4)
7 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)	241 (5.2)
8 その他	34 (0.7)
未記入	408 (8.7)
計	4,677 (100.0)

分析1 資質・能力について

高大接続改革、現行・次期学習指導要領の柱となる資質・能力を「他者理解力」「社会文化探究心」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」として取り上げ、大学1年時の資質・能力（それぞれの(T2)）に影響を及ぼしている要因について検討する。

主な結果

- 大学1年時の資質・能力は、高校2年時の同じ資質・能力（たとえば、大学1年時の「他者理解力(T2)」が高校2年時の「他者理解力(T1)」）に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で発達することが明らかとなった。
(☞分析1-1～1-4を参照)
 - 全体的には、高校2年時や大学1年時での個人的要因が資質・能力の発達を多く説明するという結果であったが、以下の属性要因（個人・家庭・高校・大学入学時）はある程度影響を及ぼしていることが明らかとなった。
 - ✓ 他者理解力(T2) > 学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5) (社会科学系の学生の他者理解力が高い)
 - ✓ 他者理解力(T2) > ジェンダー(T1) (女性の他者理解力が高い)
 - ✓ 社会文化探究心(T2) > 学部学科(理科系ダミー)(T1.5) (理科系の学生の社会文化探究心が低い)
 - ✓ 社会文化探究心(T2) > 学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5)
(6年制医療系の学生の社会文化探究心が低い)
 - ✓ 計画実行力(T2) > 大学偏差値(T1.5) (偏差値の低い大学の学生の計画実行力が高い)
 - ✓ 計画実行力(T2) > 学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5) (社会科学系の学生の計画実行力が高い)
 - ✓ 計画実行力(T2) > ジェンダー(T1) (女性の計画実行力が高い)
 - ✓ 計画実行力(T2) > 社会階層(T1.5) (社会階層の低い学生の計画実行力が高い)
 - ✓ コミュニケーション・リーダーシップ力(T2) > 都市度(T1)
(高校時に三大都市圏以外に住んでいた学生のコミュニケーション・リーダーシップ力が高い)
 - ✓ コミュニケーション・リーダーシップ力(T2) > 大学偏差値(T1.5)
(偏差値の低い大学の学生のコミュニケーション・リーダーシップ力が高い)
- (☞分析1-1～1-4を参照)

数字は標準偏回帰係数(β)

手続き

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.10 **	.07 **	.06 **	.06 **
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.00	.01	.01	.00
都市度(T1) (0:それ以外 1:三大都市圏)		-.02	-.01	.00	.00
中高一貫校(T1) (0:それ以外 1:中高一貫)		.01	.00	.00	.00
高校の大学進学程度(T1) <small>(1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)</small>		.00	-.01	.00	.00
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.00	.00	-.01
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.00	.00	-.02
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	-.02
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	.00
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.03
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.00	.01	-.01
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.02	-.02
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.05 *	.04 *	.04 *
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			.02	.02	.01
自尊感情(T1) (1-4点)			.04 *	.05 *	.03
対人関係(T1) (1-2点)			.07 **	.06 **	.06 **
キャリア意識(T1) (1-4点)			.03	.03	-.01
他者理解力(T1) (1-5点)			.30 **	.30 **	.30 **
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.05 *	.05 *	.04
計画実行力(T1) (1-5点)			.02	.02	-.01
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.05 *	.05 *	.03
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				-.04 *	-.01
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				-.01	.01
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.02	.00
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				.05 *	.07 **
学部学科 (理科学系ダミー) (T1.5)				-.01	-.01
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				.03	.02
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				.02	.01
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				.01	.01
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.00
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.03
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					-.02
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.03
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					.01
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.02
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					-.03
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.00
テレビを見る(T2) (1時間単位)					-.04 *
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					.02
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.02
ゲームをする(T2) (1時間単位)					.02
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.01
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.01
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					-.01
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.00
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					-.02
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.18 **
二つのライフ(T2) (1-3点)					.05 **
	R^2	.010	.184	.189	.227
	ΔR^2	.010 **	.174 **	.005	.038 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

資質・能力指標の一つである「他者理解力(T2)」を従属変数として、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)、個人的要因(高校2年時・大学1年時)A~Dを説明変数として、それらの説明力、影響力を検討すべく、階層重回帰分析をおこなった。

(次頁以降の手続きも同様)

*各変数の説明は「付録」を参照

結果と考察

*標準偏回帰係数(β)の絶対値が $\geq .10$ に焦点を当てて考察をおこなう。ただし、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)に関してはこの限りではない。

(次頁以降の考察も同様)

✓ **他者理解力(T2)は、高校2年時の「他者理解力(T1)」に大きく影響を受けて発達する。**

A+Bモデルの ΔR^2 が有意にもっとも大きく[.174]、フルモデル(A+B+C+D)を見ると、他者理解力(T2)をもっとも説明するのは、高校2年時の「他者理解力(T1)」[$\beta=.30$]であった。この結果は、「他者理解力(T1)」が高校2年時までに発達し、大学1年時の他者理解力(T2)に影響を及ぼすことを示唆している。

フルモデルを見ると、ほかにも、**・主体的な学習態度(T2)** [$\beta=.18$]も他者理解力(T2)を有意に説明していることがわかる。この結果は、高校2年時の上記の変数に加え、大学生になってから主体的な学習態度をとれることが、他者理解力(T2)をさらに高めることを示唆している。

✓ **【属性要因の影響】: 大きくはないが、他者理解力(T2)には、「学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)」「ジェンダー(T1)」の影響が認められる。**

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、**・学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)** [$\beta=.07$]
・ジェンダー(T1) [$\beta=.06$]が他者理解力(T2)を有意に説明している。この結果は、他者理解力(T2)が、社会科学系の学生において、また女性において高いことを示唆している。

数字は標準偏回帰係数(β)

結果と考察

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.01	.01	-.02	.01
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.01	.01	.02	.01
都市度(T1) (0:それ以外 1:三大都市圏)		.00	-.01	-.01	-.01
中高一貫校(T1) (0:それ以外 1:中高一貫)		.00	-.04 *	-.02	.00
高校の大学進学程度(T1) (1:その他の私立・短大等に多数進学 2:中堅国公立大、私立に多数進学 3:難関国公立大・私立に多数進学)		-.02	-.04 *	.00	.00
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.01	.01	.01
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.03	.05 *	.01
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			-.01	-.01	.00
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.03	.03
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.03
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.06 **	.05 **	.02
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.01	-.01	-.01
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			-.01	-.01	.01
SSH経験(T1) (0:それ以外 1:SSH受講&満足)			-.03	-.01	-.03
自尊感情(T1) (1-4点)			.07 **	.09 **	.05
対人関係(T1) (1-2点)			.03	.02	.01
キャリア意識(T1) (1-4点)			.07 **	.06 **	.02
他者理解力(T1) (1-5点)			.05 *	.04	.04 *
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.29 **	.29 **	.25 **
計画実行力(T1) (1-5点)			.01	.02	-.02
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.06 **	.06 *	.04
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0:移動なし 1:移動あり)				.00	-.01
国公立大学(T1.5) (0:私立大学 1:国公立大学)				-.04 *	.00
大学偏差値(T1.5) (2:49以下 3:50-59 4:60-64 5:65以上)				-.06 **	-.03
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				-.01	.01
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				-.08 **	-.07 **
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				-.02	-.02
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				-.05 **	-.06 **
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				-.03	-.04
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.03
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.03
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					.02
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.01
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					-.04 *
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.05 **
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					.01
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.04 **
テレビを見る(T2) (1時間単位)					.03
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.04 *
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					.01
ゲームをする(T2) (1時間単位)					.03
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.09 **
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.02
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					.01
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.09 **
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					-.01
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.25 **
二つのライフ (T2) (1-3点)					.08 **
	R^2	.000	.186	.197	.309
	ΔR^2	.000	.185 **	.011 **	.112 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

✓ 社会文化探究心(T2)は、高校2年時の「社会文化探究心(T1)」に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で発達する。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、社会文化探究心(T2)をもっとも説明するのは「社会文化探究心(T1)」[$\beta = .25$]ならびに「主体的な学習態度(T2)」[$\beta = .25$]であった。両係数はほぼ同じであり、この結果は、社会文化探究心(T2)が高校2年時の「社会文化探究心(T1)」に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で発達することを示唆している。

✓ 【属性要因の影響】: 大きくはないが、社会文化探究心(T2)には「学部学科(理科系ダミー)(T1.5)」 「学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5)」で負の影響が認められる。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
 ・学部学科(理科系ダミー)(T1.5) [$\beta = -.07$]
 ・学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5) [$\beta = -.06$]
 が社会文化探究心(T2)を有意に説明している。この結果は、社会文化探究心(T2)が、理科系、6年制医療系の学生において低いことを示唆している。

数字は標準偏回帰係数(β)

結果と考察

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.07 **	.04 *	.04	.04 *
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		-.02	-.03	-.02	-.03 *
都市度(T1) (0:それ以外 1:三大都市圏)		.00	.01	.01	.00
中高一貫校(T1) (0:それ以外 1:中高一貫)		.01	-.02	.01	.01
高校の大学進学程度(T1) (1:その他の私大・短大等に多数進学 2:中堅国公立大、私大に多数進学 3:難関国公立大・私大に多数進学)		.01	-.02	.02	.02
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.04	.04	.01
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.00	.01	-.02
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			.01	.01	.01
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.04	-.04 *	.02
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.00	.00	.02
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.01
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.01	-.01	.00
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.03	.02	.01
SSH経験(T1) (0:それ以外 1:SSH受講&満足)			.01	.01	-.01
自尊感情(T1) (1-4点)			.10 **	.11 **	.08 **
対人関係(T1) (1-2点)			.09 **	.08 **	.07 **
キャリア意識(T1) (1-4点)			.06 **	.05 **	-.03
他者理解力(T1) (1-5点)			.06 **	.05 *	.06 **
社会文化探究心(T1) (1-5点)			-.03	-.02	-.04 *
計画実行力(T1) (1-5点)			.28 **	.29 **	.24 **
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.04	.05 *	.01
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0:移動なし 1:移動あり)				-.02	-.02
国公立大学(T1.5) (0:私立大学 1:国公立大学)				-.06 **	-.03
大学偏差値(T1.5) (2:49以下 3:50-59 4:60-64 5:65以上)				-.09 **	-.07 **
学部学科(社会科学系ダミー) (T1.5)				.00	.04 *
学部学科(理科系ダミー) (T1.5)				.04	.04
学部学科(4年制医療系ダミー) (T1.5)				.02	.01
学部学科(6年制医療系ダミー) (T1.5)				.02	.01
学部学科(その他ダミー) (T1.5)				.03	.02
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.00
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.05 **
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					.03 *
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.01
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					.08 **
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.02
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					.04 *
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.02
テレビを見る(T2) (1時間単位)					-.05 **
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.02
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.07 **
ゲームをする(T2) (1時間単位)					-.01
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.04 *
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					-.03
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					.00
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.00
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					.01
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.29 **
二つのライフ (T2) (1-3点)					.15 **
	R^2	.005	.211	.222	.362
	ΔR^2	.005	.205 **	.012 **	.139 **

* p<.05 ** p<.01

✓ 計画実行力(T2)は、高校2年時の「計画実行力(T1)」を基礎としつつも、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連において、発達がより説明される。

A+Bモデルの ΔR^2 が有意にもっとも大きく[.205]、フルモデル(A+B+C+D)を見たとき、高校2年時の「計画実行力(T1)」[$\beta=.24$]の係数が有意に大きい。しかしながらフルモデルにおいて係数が有意にもっとも大きいのは「主体的な学習態度(T2)」[$\beta=.29$]である。以上の結果は、計画実行力(T2)が高校2年時の個人的要因(計画実行力)を基礎としながら、最終的には大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で発達することを示唆している。

ほかにも、
・二つのライフ(T2) [$\beta=.15$]
が計画実行力(T2)を有意に説明している。

✓ 【属性要因の影響】:大きくはないが、計画実行力(T2)には、「大学偏差値(T1.5)」「学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)」「ジェンダー(T1)」「社会階層(T1.5)」の影響が認められる。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
・大学偏差値(T1.5)[$\beta=-.07$]
・学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)[$\beta=.04$]
・ジェンダー(T1)[$\beta=.04$]
・社会階層(T1.5)[$\beta=-.03$]
が計画実行力(T2)を有意に説明している。この結果は、計画実行力(T2)が、偏差値の低い大学の学生において、社会科学系の学生において、女性において、社会階層の低い学生において高いことを示唆している。

分析1-4 大学1年時のコミュニケーション・リーダーシップ力

階層重回帰分析の結果

数字は標準偏回帰係数(β)

結果と考察

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.00	-.02	-.03	-.03
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.02	.01	.02	.01
都市度(T1) (0: それ以外 1: 三大都市圏)		-.05 **	-.05 **	-.04 **	-.05 **
中高一貫校(T1) (0: それ以外 1: 中高一貫)		.03	-.01	-.01	.00
高校の大学進学程度(T1) <small>(1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)</small>		.02	.00	.02	.02
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.01
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.00	.00	-.01
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			.00	.00	.00
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.04 *
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.03
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			-.04 *	.04 *	.03
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			.01	.01	.01
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.07 **	.06 **	.05 **
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			-.01	-.01	-.02
自尊感情(T1) (1-4点)			-.05 *	.05 **	.03
対人関係(T1) (1-2点)			.11 **	.10 **	.09 **
キャリア意識(T1) (1-4点)			.10 **	.10 **	.04 *
他者理解力(T1) (1-5点)			.01	.01	.01
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.02	.03	.02
計画実行力(T1) (1-5点)			.02	.02	-.01
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.36 **	.36 **	.33 **
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				.00	.00
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				-.01	.01
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.06 **	-.04 *
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				.01	.04
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				-.01	-.01
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				.01	.00
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				.03	.03
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				.00	.00
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.01
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.00
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					-.02
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.05 **
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					.06 **
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.02
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					.02
テレビを見る(T2) (1時間単位)					-.06 **
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					.04 *
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.03
ゲームをする(T2) (1時間単位)					-.01
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.02
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.00
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					.03
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.00
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					.01
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.25 **
二つのライフ (T2) (1-3点)					.10 **
	R^2	.005	.293	.297	.374
	ΔR^2	.005 *	.288 **	.003	.077 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

✓ コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)は、高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で発達する。

A+Bモデルの ΔR^2 が有意にもっとも大きく[.288]、フルモデル(A+B+C+D)を見ると、「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」 $[\beta = .33]$ がコミュニケーション・リーダーシップ力(T2)をもっとも説明している。しかしながら、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」 $[\beta = .25]$ もコミュニケーション・リーダーシップ力(T2)をかなり説明している。以上の結果は、コミュニケーション・リーダーシップ力が高校2年時のそれに影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連において発達することを示唆している。

ほかにも、
・二つのライフ(T2) $[\beta = .10]$
もコミュニケーション・リーダーシップ力(T2)を有意に説明している。

✓ 【属性要因の影響】: 大きくはないが、コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)には、「都市度(T1)」 「大学偏差値(T1.5)」の影響が認められる。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
・都市度(T1) $[\beta = -.05]$
・大学偏差値(T1.5) $[\beta = -.04]$
がコミュニケーション・リーダーシップ力(T2)を有意に説明している。この結果は、コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)が、高校時に三大都市圏以外に住んでいた学生において、偏差値の低い大学の学生において高いことを示唆している。

分析2 学習について

大学1年時の学習を「成績(T2)」「授業外学習時間(T2)」「アクティブラーニング外化(T2)」「主体的な学習態度(T2)」として取り上げ、それらに影響を及ぼしている要因について検討する。

主な結果

- 「成績(T2)」「授業外学習時間(T2)」は、同じ大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で大きく説明されていた。「アクティブラーニング外化(T2)」にも同じ傾向が認められたが、「アクティブラーニング外化(T2)」には高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」の影響も大きく受けていた。
(☞分析2-1～2-3を参照)
 - 大学1年時の資質・能力(分析1を参照)や分析2の学習に大きな関連を示した「主体的な学習態度(T2)」は、高校2年時の「計画実行力(T1)」に影響を受けながら、大学1年時の「二つのライフ(T2)」や「勉強のための本を読む(T2)」との関連で説明されることが明らかとなった。
(☞分析2-4を参照)
 - 全体的には、高校2年時や大学1年時の個人的要因が大学1年時の学習をより説明するという結果であったが、以下の属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)は大学1年時の学習に影響を及ぼしていることが明らかとなった。
 - ✓ 成績(T2) > ジェンダー(T1) (女性のほうが成績が良い)
 - ✓ 授業外学習時間(T2) > 学部学科(理科系ダミー)(T1.5)
(理科系の学生の授業外学習時間が長い)
 - ✓ 授業外学習時間(T2) > 大学偏差値(T1.5) (偏差値の高い大学の学生の授業外学習時間が長い)
 - ✓ 授業外学習時間(T2) > 学部学科(その他ダミー)(T1.5)
(その他の学部学科の学生の授業外学習時間が長い)
 - ✓ 授業外学習時間(T2) > 中高一貫校(T1) (中高一貫校出身の学生の授業外学習時間が短い)
 - ✓ アクティブラーニング外化(T2) > ジェンダー(T1) (男性のアクティブラーニング外化が高い)
 - ✓ アクティブラーニング外化(T2) > 大学偏差値(T1.5)
(偏差値の低い大学の学生のアクティブラーニング外化が高い)
 - ✓ アクティブラーニング外化(T2) > 学部学科(理科系ダミー)(T1.5)
(理科系の学生のアクティブラーニング外化が低い)
 - ✓ アクティブラーニング外化(T2) > 学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5)
(6年制医療系の学生のアクティブラーニング外化が高い)
 - ✓ アクティブラーニング外化(T2) > 中高一貫校(T1)
(中高一貫校出身の学生のアクティブラーニング外化が高い)
 - ✓ 主体的な学習態度(T2) > 国公立大学(T1.5) (私立大学の学生の主体的な学習態度が高い)
 - ✓ 主体的な学習態度(T2) > 大学偏差値(T1.5) (偏差値の低い大学の学生の主体的な学習態度が高い)
 - ✓ 主体的な学習態度(T2) > 学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)
(社会科学系の学生の主体的な学習態度が低い)
- (☞分析2-1～2-4を参照)

数字は標準偏回帰係数(β)

手続き

学習指標の一つである「成績(T2)」を従属変数として、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)、個人的要因(高校2年時・大学1年時)A~Dを説明変数として、それらの説明力、影響力を検討すべく、階層重回帰分析をおこなった。

(次頁以降の手続きも同様)

*各変数の説明は「付録」を参照

結果と考察

*標準偏回帰係数(β)の絶対値が $\geq .10$ に焦点を当てて考察をおこなう。ただし、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)に関してはこの限りではない。

(次頁以降の考察も同様)

✓ **成績(T2)の高低は、主に大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で説明される。**

フルモデル(A+B+C+D)の ΔR^2 が有意にもっとも大きく[.116]、成績(T2)をもっとも説明する変数は、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」[β=.32]であった。この結果は、成績(T2)が大学に入学するまでの(直接)要因ではなく、大学1年時の、とくに「主体的な学習態度(T2)」との関連で高低が説明されることを示唆している。

✓ **【属性要因の影響】: 大きくはないが、成績(T2)には「ジェンダー(T1)」の影響が認められる。**

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、**・ジェンダー(T1)** [β=.08]が成績(T2)を有意に説明している。この結果は、女性において成績(T2)が良いことを示唆している。

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A: 属性要因 (個人・家庭・高校)】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.10 **	.09 **	.07 **	.08 **
社会階層(T1.5) (1: 低 2: 中 3: 高)		-.01	-.02	-.02	-.02
都市度(T1) (0: それ以外 1: 三大都市圏)		.02	.02	.02	.02
中高一貫校(T1) (0 それ以外 1: 中高一貫)		-.04	-.05 *	-.04	-.03
高校の大学進学程度(T1) (1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)		.00	-.01	.01	.02
【B: 個人的要因 (高校2年時)】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.03	-.03
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.01	.01	-.02
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	-.01
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNSなど(T1) (0.5時間単位)			-.06 **	-.07 **	-.01
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.00	-.01	-.01
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.03	-.04 *
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	-.02
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			-.01	-.01	-.01
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			-.02	-.02	-.03
自尊感情(T1) (1-4点)			.05 *	.06 **	.04
対人関係(T1) (1-2点)			.02	.02	.02
キャリア意識(T1) (1-4点)			.01	.00	-.03
他者理解力(T1) (1-5点)			.01	.01	.03
社会文化探究心(T1) (1-5点)			-.05 *	-.05 *	-.07 **
計画実行力(T1) (1-5点)			.13 **	.14 **	.08 **
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.02	.02	-.01
【C: 属性要因 (大学入学時)】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				.02	.02
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				-.06 *	-.01
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.04	.01
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				-.06 *	-.02
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				-.02	-.01
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				.01	.00
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				.00	.01
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				-.01	-.01
【D: 個人的要因 (大学1年時)】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					-.01
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.01
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					.02
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					-.04
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					-.02
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.01
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					-.04
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.03
テレビを見る(T2) (1時間単位)					.04
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.01
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.03
ゲームをする(T2) (1時間単位)					.00
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.03
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.00
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					-.01
新聞を読む(T2) (1時間単位)					-.02
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					-.01
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.32 **
二つのライフ (T2) (1-3点)					.04 *
	R^2	.013	.052	.059	.175
	ΔR^2	.013 **	.039 **	.007 *	.116 **

* p<.05 ** p<.01

*「授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする(T2)」

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因(個人・家庭・高校)】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.00	-.01	.02	.02
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.07 **	.06 **	.04 *	.03
都市度(T1) (0:それ以外 1:三大都市圏)		.03	.02	.01	.00
中高一貫校(T1) (0:それ以外 1:中高一貫)		-.03	-.05 **	-.06 **	-.04 *
高校の大学進学程度(T1) (1:その他の私大・短大等に多数進学 2:中堅国公立大、私大に多数進学 3:難関国公立大・私大に多数進学)		.04 *	.00	-.02	-.01
【B：個人的要因(高校2年時)】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.03	-.02
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.12 **	.11 **	.08 **
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			.00	.01	-.02
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.08 **	-.08 **	-.03
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.04	-.03
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.01
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	-.02
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.03	.02	-.03
SSH経験(T1) (0:それ以外 1:SSH受講&満足)			.05 *	.03	.01
自尊感情(T1) (1-4点)			-.03	.01	-.02
対人関係(T1) (1-2点)			-.04 *	-.03	-.03
キャリア意識(T1) (1-4点)			.08 **	.07 **	.04
他者理解力(T1) (1-5点)			-.05 *	-.05 *	-.04 *
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.02	.03	.00
計画実行力(T1) (1-5点)			.05 *	.05 *	.02
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.01	.01	-.01
【C：属性要因(大学入学時)】					
地域移動(T1.5) (0:移動なし 1:移動あり)				-.01	-.03
国公立大学(T1.5) (0:私立大学 1:国公立大学)				-.02	.01
大学偏差値(T1.5) (2:49以下 3:50-59 4:60-64 5:65以上)				.05 *	.06 **
学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)				-.08 **	-.04
学部学科(理科系ダミー)(T1.5)				.14 **	.11 **
学部学科(4年制医療系ダミー)(T1.5)				.03	.01
学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5)				.05 **	.02
学部学科(その他ダミー)(T1.5)				.07 **	.05 **
【D：個人的要因(大学1年時)】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.19 **
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					-
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					-.02
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					-.01
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					-.06 **
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.01
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					-.10 **
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					-.02
テレビを見る(T2) (1時間単位)					-.03
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.01
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.03
ゲームをする(T2) (1時間単位)					.00
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.12 **
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					-.04 *
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					.00
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.03
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					.02
主体的な学習態度(T2) (1-5点)					.19 **
二つのライフ(T2) (1-3点)					.05 *
	R^2	.008	.066	.098	.216
	ΔR^2	.008 **	.058 **	.032 **	.118 **

* p<.05 ** p<.01

結果と考察

「D:個人的要因(大学1年時)」のなかの質問「授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする(T2)」を「授業外学習時間(T2)」と見なし、分析をおこなった。

✓ **授業外学習時間(T2)の長さは、主に大学1年時の「授業や実験に参加する(T2)」「主体的な学習態度(T2)」との関連で説明される。**

フルモデル(A+B+C+D)の ΔR^2 が有意にもっとも大きく[.118]、授業外学習時間(T2)をもっとも説明する変数は大学1年時の「授業や実験に参加する(T2)」 $[\beta=.19]$ と「主体的な学習態度(T2)」 $[\beta=.19]$ であった。この結果は、授業外学習時間(T2)が大学に入学するまでの要因に影響を受けるというよりは、大学生になってからの個人的要因、とくに「授業や実験に参加する(T2)」「主体的な学習態度(T2)」との関連で説明されることを示唆している。

ほかにも、
・勉強のための本を読む(T2) $[\beta=.12]$ も授業外学習時間(T2)を有意に説明している。大学1年時の授業外学習時間(T2)は、いわゆる読書をする者において長いことを示唆している。

✓ **【属性要因の影響】: 授業外学習時間(T2)には、「学部学科(理科系ダミー)(T1.5)」の影響が大きく認められる。ほかにも「大学偏差値(T1.5)」「学部学科(その他ダミー)(T1.5)」「中高一貫校(T1)」の影響も認められる。**

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
・学部学科(理科系ダミー)(T1.5) $[\beta=.11]$
・大学偏差値(T1.5) $[\beta=.06]$
・学部学科(その他ダミー)(T1.5) $[\beta=.05]$
・中高一貫校(T1) $[\beta=-.04]$ が授業外学習時間(T2)を有意に説明している。この結果は、理科系の学生において、偏差値の高い大学の学生において、その他の学部学科の学生において、中高一貫校出身ではない学生において授業外学習時間(T2)が長いことを示唆している。

数字は標準偏回帰係数(β)

結果と考察

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		-.06 **	-.06 **	-.09 **	-.09 **
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.02	.02	.03	.02
都市度(T1) (0: それ以外 1: 三大都市圏)		-.04	-.04	-.03	-.03
中高一貫校(T1) (0 それ以外 1: 中高一貫)		.05 **	.02	.03	.04 *
高校の大学進学程度(T1) (1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)		.01	-.01	.01	.02
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.04	.04	.03
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.01	.02	-.01
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.04 *
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.03	-.02
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.01	.00	.01
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.05 **	.05 **	.04 *
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.03
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.02	.01	.01
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			.00	.00	-.01
自尊感情(T1) (1-4点)			.01	.02	.01
対人関係(T1) (1-2点)			.08 **	.07 **	.07 **
キャリア意識(T1) (1-4点)			.09 **	.08 **	.05 *
他者理解力(T1) (1-5点)			-.03	-.03	-.03
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.05 *	.05 *	.03
計画実行力(T1) (1-5点)			-.04	-.03	-.05 *
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.25 **	.25 **	.22 **
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				-.01	-.02
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				.00	-.03
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.08 **	-.07 **
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				.00	-.03
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				-.06 *	-.07 **
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				-.03	-.02
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				.05 *	.05 *
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				-.01	-.01
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.02
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					.06 **
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					-.01
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.02
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					.02
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.00
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					.02
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.03
テレビを見る(T2) (1時間単位)					-.02
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					.05 **
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					.04 *
ゲームをする(T2) (1時間単位)					.00
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.04
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					-.02
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					.00
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.01
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					-.04
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					.22 **
二つのライフ (T2) (1-3点)					.05 *
	R^2	.009	.138	.148	.211
	ΔR^2	.009 **	.129 **	.010 **	.064 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

✓ **アクティブラーニング外化(T2)は、高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で説明される。**

A+Bモデルの ΔR^2 が有意に大きく[.129]、フルモデル(A+B+C+D)を見ると、高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」 $[\beta=.22]$ がアクティブラーニング外化(T2)を有意に説明している。他方で、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」 $[\beta=.22]$ もアクティブラーニング外化(T2)を同等に、有意に説明している。以上の結果は、アクティブラーニング外化(T2)が、高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」に影響を受けつつ、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」との関連で説明されることを示唆している。

✓ **【属性要因の影響】：大きくはないが、アクティブラーニング外化(T2)には、多くの属性要因の影響が認められる。**

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
 ・ジェンダー(T1) $[\beta=-.09]$
 ・大学偏差値(T1.5) $[\beta=-.07]$
 ・学部学科(理科系ダミー)(T1.5)
 $[\beta=-.07]$
 ・学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5) $[\beta=.05]$
 ・中高一貫校(T1) $[\beta=.04]$
 がアクティブラーニング外化(T2)を有意に説明していた。この結果は、男性において、偏差値の低い大学の学生において、6年制医療系の学生において、中高一貫校出身の学生においてアクティブラーニング外化が高く、理科系の学生において低いことを示唆している。

数字は標準偏回帰係数(β)

結果と考察

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.03	.03	.00	.04
社会階層(T1.5) (1:低 2:中 3:高)		.03	.01	.02	.01
都市度(T1) (0: それ以外 1: 三大都市圏)		.01	.01	.01	.01
中高一貫校(T1) (0 それ以外 1: 中高一貫)		-.03	-.06 **	-.03	-.02
高校の大学進学程度(T1) (1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)		-.02	-.07 **	-.01	-.01
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.03
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.06 **	.07 **	.05 *
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			-.05 *	-.05 *	-.05 *
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.12 **	-.14 **	-.06 **
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			.00	-.01	.00
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.04 *	.04	.01
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.01	-.02	-.02
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			.01	.00	.02
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			.02	.02	.01
自尊感情(T1) (1-4点)			.05 *	.06 **	.03
対人関係(T1) (1-2点)			.00	-.02	-.01
キャリア意識(T1) (1-4点)			.07 **	.06 **	.01
他者理解力(T1) (1-5点)			.03	.01	.02
社会文化探究心(T1) (1-5点)			.06 **	.07 **	.04 *
計画実行力(T1) (1-5点)			.12 **	.14 **	.13 **
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.08 **	.09 **	.09 **
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				.01	.02
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				-.11 **	-.08 **
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.10 **	-.07 **
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				-.09 **	-.06 **
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				.01	.01
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				.01	-.01
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				-.02	-.04
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				.02	.02
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.06 **
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					-
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					-.03
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					-.06 **
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					-.07 **
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					-.03
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					-.09 **
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.02
テレビを見る(T2) (1時間単位)					.01
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.11 **
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.02
ゲームをする(T2) (1時間単位)					-.01
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.12 **
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.03
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					-.03
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.05 **
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					.00
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					-
二つのライフ (T2) (1-3点)					.15 **
	R^2	.003	.122	.148	.235
	ΔR^2	.003	.119 **	.027 **	.086 **

* p<.05 ** p<.01

✓ 主体的な学習態度(T2)は、高校2年時の「計画実行力(T1)」を基礎としながらも、大学1年時の「二つのライフ(T2)」や「勉強のための本を読む(T2)」との関連で説明される。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
 ・「二つのライフ(T2)」[β=.15]
 ・「計画実行力(T1)」[β=.13]
 ・「勉強のための本を読む(T2)」
 [β=.12]
 ・「電話、LINE、メール、SNSをする(T2)」[β=-.11]
 が主体的な学習態度(T2)を有意に説明した。この結果は、主体的な学習態度(T2)が、高校2年時の「計画実行力(T1)」を基礎としながら、大学1年時の「二つのライフ(T2)」や「勉強のための本を読む(T2)」との関連で説明されることを示唆している。

✓ 【属性要因の影響】：大きくはないが、主体的な学習態度(T2)には、「国公立大学(T1.5)」「大学偏差値(T1.5)」「学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)」の影響が認められる。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
 ・国公立大学(T1.5)[β=-.08]
 ・大学偏差値(T1.5)[β=-.07]
 ・学部学科(社会科学系ダミー)(T1.5)[β=-.06]
 が主体的な学習態度(T2)を有意に説明していた。この結果は、私立の学生において、偏差値の低い大学において主体的な学習態度が高く、社会科学系の学生において低いことを示唆している。

分析3 キャリア形成について

主体的な学習態度(T2)を説明していた大学1年時の「二つのライフ(T2)」をキャリア形成の変数として取り上げ、それに影響を及ぼしている要因について検討する。

主な結果

- 二つのライフ(T2)は、基本的に高校2年時の「キャリア意識(T1)」に影響を受けて発達することが明らかとなった。 (☞分析3を参照)
 - 二つのライフ(T2)は、大学2年時の個人的要因(主に「キャリア意識(T1)」)に大きく影響を受けるが、他方で大きくはないながらも、以下の属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)は二つのライフ(T2)に影響を及ぼしていることが明らかとなった。
 - ✓ 二つのライフ(T2) > 学部学科(6年制医療系ダミー)(T1.5) (6年制医療系の学生の二つのライフが良好である)
 - ✓ 二つのライフ(T2) > 学部学科(4年制医療系ダミー)(T1.5) (4年制医療系の学生の二つのライフが良好である)
 - ✓ 二つのライフ(T2) > 大学偏差値(T1.5) (偏差値の低い大学の学生の二つのライフが良好である)
 - ✓ 二つのライフ(T2) > 学部学科(理科系ダミー)(T1.5) (理科系の学生の二つのライフが弱い)
- (☞分析3を参照)

数字は標準偏回帰係数(β)

手続き

説明変数	モデル	A	A+B	A+B+C	A+B+C+D
【A：属性要因（個人・家庭・高校）】					
ジェンダー(T1) (1:男 2:女)		.02	.01	-.04 *	-.03
社会階層(T1.5) (1: 低 2: 中 3: 高)		.03	.02	.03	.03
都市度(T1) (0: それ以外 1: 三大都市圏)		-.01	-.01	-.01	-.01
中高一貫校(T1) (0 それ以外 1: 中高一貫)		.01	-.04	-.03	-.02
高校の大学進学程度(T1) (1: その他の私大・短大等に多数進学 2: 中堅国公立大、私大に多数進学 3: 難関国公立大・私大に多数進学)		-.02	-.05 **	-.01	-.01
【B：個人的要因（高校2年時）】					
部活動時間(T1) (0.5時間単位)			.02	.02	.03
授業以外の学習時間(T1) (0.5時間単位)			.00	.01	-.01
友だちと遊ぶ(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.03
友だちと電話、LINE、メール交換、ツイッター、SNS など(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.03	.00
ゲームをする(T1) (0.5時間単位)			-.03	-.04	-.01
読書をする(マンガ・雑誌を除く)(T1) (0.5時間単位)			.03	.03	.02
マンガ・雑誌を読む(T1) (0.5時間単位)			-.02	-.02	-.02
学校行事に積極的に参加する(T1) (1-4点)			-.02	-.02	-.02
SSH経験(T1) (0: それ以外 1: SSH受講&満足)			.04 *	.04 *	.03
自尊感情(T1) (1-4点)			.04 *	.05 **	.05 *
対人関係(T1) (1-2点)			.06 **	.04	.03
キャリア意識(T1) (1-4点)			.33 **	.30 **	.29 **
他者理解力(T1) (1-5点)			-.01	-.02	-.01
社会文化探究心(T1) (1-5点)			-.01	.01	-.01
計画実行力(T1) (1-5点)			.00	.01	.01
コミュニケーション・リーダーシップ力(T1) (1-5点)			.06 *	.07 **	.06 **
【C：属性要因（大学入学時）】					
地域移動(T1.5) (0: 移動なし 1: 移動あり)				.00	.01
国公立大学(T1.5) (0: 私立大学 1: 国公立大学)				-.04 *	-.02
大学偏差値(T1.5) (2: 49以下 3: 50-59 4: 60-64 5: 65以上)				-.09 **	-.09 **
学部学科 (社会科学系ダミー) (T1.5)				-.04	-.03
学部学科 (理科系ダミー) (T1.5)				-.06 *	-.06 *
学部学科 (4年制医療系ダミー) (T1.5)				.09 **	.09 **
学部学科 (6年制医療系ダミー) (T1.5)				.09 **	.10 **
学部学科 (その他ダミー) (T1.5)				.00	.01
【D：個人的要因（大学1年時）】					
授業や実験に参加する(T2) (1時間単位)					.06 **
授業に関する勉強をする(T2) (1時間単位)					-
自主的な勉強をする(T2) (1時間単位)					.09 **
友だちと遊ぶ(T2) (1時間単位)					.01
クラブサークル活動をする(T2) (1時間単位)					-.01
コンパや懇親会に参加する(T2) (1時間単位)					.02
アルバイトをする(T2) (1時間単位)					.01
ボランティアなどをする(T2) (1時間単位)					.02
テレビを見る(T2) (1時間単位)					.01
電話、LINE、メール、SNSをする(T2) (1時間単位)					-.07 **
インターネットサーフィンをする(T2) (1時間単位)					-.01
ゲームをする(T2) (1時間単位)					-.07 **
勉強のための本を読む(T2) (1時間単位)					.08 **
娯楽のための本(マンガ雑誌を除く)を読む(T2) (1時間単位)					.01
マンガや雑誌を読む(T2) (1時間単位)					-.03
新聞を読む(T2) (1時間単位)					.00
通学にかかる時間(T2) (1時間単位)					-.03
主体的な学習態度 (T2) (1-5点)					-
二つのライフ (T2) (1-3点)					-
	R^2	.001	.152	.182	.215
	ΔR^2	.001	.151 **	.030 **	.033 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

「二つのライフ(T2)」を従属変数として、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)、個人的要因(高校2年時・大学1年時)A~Dを説明変数として、それらの説明力、影響力を検討すべく、階層重回帰分析をおこなった。ただし、分析2で説明変数に用いた授業に関する勉強をする(授業外学習時間)(T2)、主体的な学習時間(T2)は説明変数には入れずに分析をおこなった。

*各変数の説明は「付録」を参照

結果と考察

*標準偏回帰係数(β)の絶対値が $\geq .10$ に焦点を当てて考察をおこなう。ただし、属性要因(個人・家庭・高校・大学入学時)に関してはこの限りではない。

✓ 二つのライフ(T2)は、高校2年時の「キャリア意識(T1)」に影響を受けて発達する。

A+Bモデルの ΔR^2 がもっとも大きく[.151]、フルモデル(A+B+C+D)を見ると、二つのライフ(T2)をもっとも説明するのは、高校2年時の「キャリア意識(T1)」[β=.29]である。この結果は、キャリア意識が高校2年時までに発達し、大学1年時の二つのライフ(T2)に影響を及ぼすことを示唆している。

✓【属性要因の影響】:大きくはないが、二つのライフ(T2)は、多くの属性要因の影響を受けている。

フルモデル(A+B+C+D)を見ると、
 ・学部学科(6年制医療系ダミー) (T1.5) [β=.10]
 ・学部学科(4年制医療系ダミー) (T1.5) [β=.09]
 ・大学偏差値(T1.5) [β=-.09]
 ・学部学科(理科系ダミー)(T1.5) [β=-.06]
 が二つのライフ(T2)を有意に説明していた。この結果は、6年制医療系、4年生医療系の学生において、偏差値の低い大学の学生において二つのライフは良好であり、理科系の学生において二つのライフが弱いことを示唆している。

分析4 まとめの分析

分析の目的は、分析4-1、分析4-2を参照のこと。

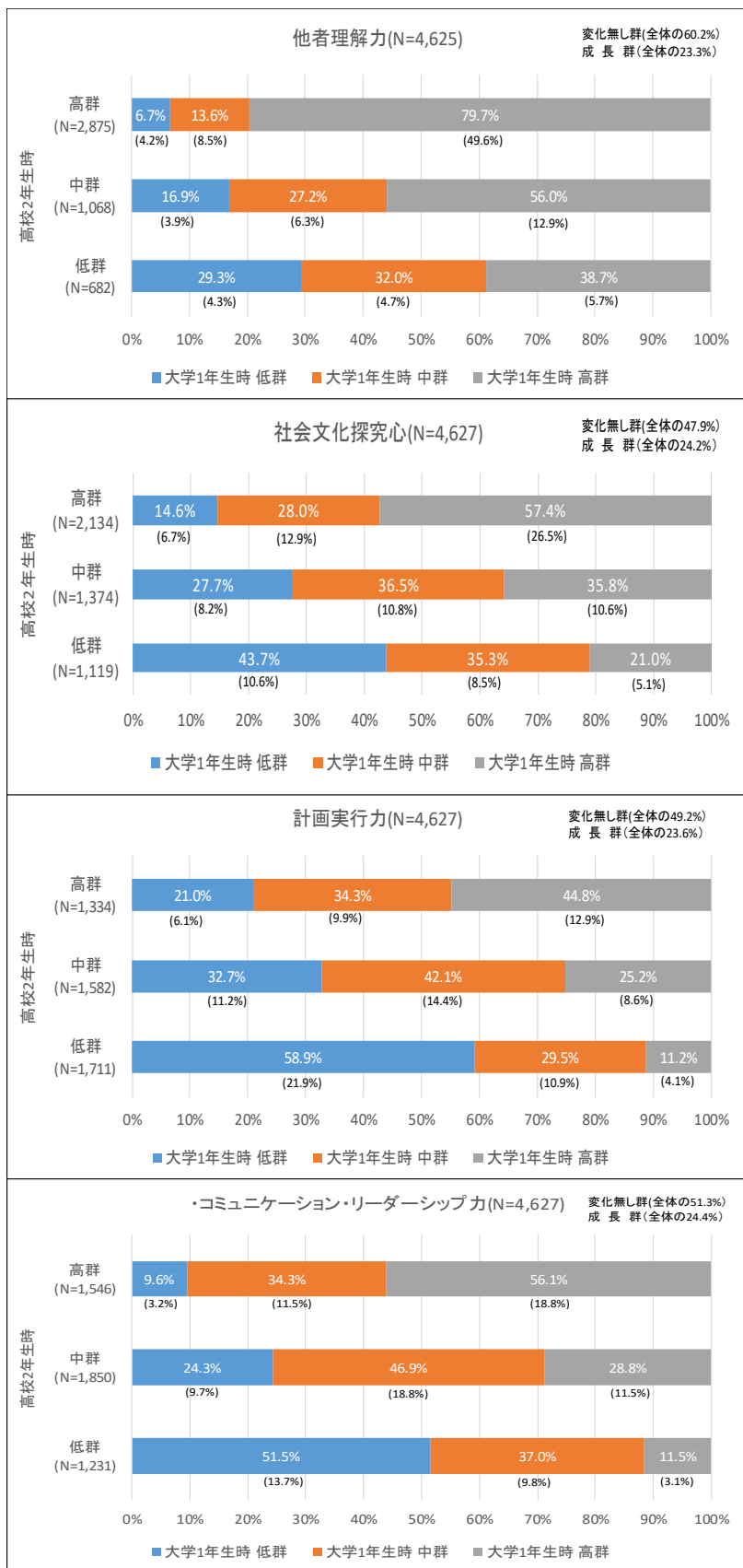
主な結果

- 資質・能力としての「他者理解力」「社会文化探究心」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」は、高校2年時から大学1年時にかけて変化しない者が47～60%見られた。成長した者はわずか23～24%に過ぎなかった。
(☞分析4-1を参照)
- 構造方程式モデルにより、次の点は分析1～3と同じ結果であることを確認した。すなわち、
 - ✓ 高校2年時における「資質・能力(T1)」は、大学1年時のそれぞれの「資質・能力(T2)」に影響を及ぼしていた。分析4-1の結果も支持するものである。
 - ✓ 大学1年時の「資質・能力(T2)」や多くの学習に影響を及ぼしている「主体的な学習態度(T2)」は、「二つのライフ(T2)」から影響を受けていた。両者の因果関係は今後さらなる検討が必要であるが、少なくとも両者の相関の高さが資質・能力の発達や学習に関係していることは確かなようである。
 - ✓ 大学1年時の「アクティブラーニング外化(T2)」は、高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」と「主体的な学習態度(T2)」に影響を受けていた。
 - ✓ 大学1年時の「二つのライフ(T2)」は、高校2年時の「キャリア意識(T1)」に影響を受けていた。

(☞分析4-2を参照)

【分析4-1】 高校2年時(T1)から大学1年時(T2)にかけて資質・能力はどれだけ変化するか？

大学1年時の資質・能力(T2)が高校2年時の資質・能力(T1)に大きな影響を受けているという分析1の結果を受けて、ここでは両者の関係を割合で示す補足的な分析をおこなった。



* 絶対得点で分類: 低群 ≤ 3.0点、3.0点 < 中群 < 4.0点、4.0点 ≤ 高群

** () 内の%は、全体を100%としたときの割合を指す。

結果と考察

- ✓ 「変化無し群」を高→高、中→中、低→低とすると、**変化無し群は全体の47-60%**であった。
- ✓ 分析1の結果から、資質・能力(T2)には、大学1年時の「**主体的な学習態度(T2)**」も影響を及ぼしていることが明らかとされているので、上記の変化無し群には、大学生になってうまく主体的な学習態度がとれていることも含めて理解されなければならないかもしれない。
- ✓ いずれにしても、変化無し群が47-60%という数字は大きく、基本的に、高校2年時の資質・能力は変化しにくいと理解したほうがいいのかもわからない。
- ✓ 他者理解力は変化無し群の割合が高かったが(60.2%)、これは高校2年時ですでに高群の割合が高く、その79.7%が高群へ変わらず移行したことを意味するものである。近い資質・能力としてのコミュニケーション・リーダーシップ力と比較してみるとおもしろい。

・また、「成長群」を低→中or高、中→高とすると、**成長群は全体の23-24%**であった。

参考

・本調査の4つの資質・能力の得点は、生徒学生の自己評定によるものだが、河合塾の標準テストPROGにおけるコンピテンシーと低～中程度の相関が見られるものであり(表を参照)、一定程度の客観的な資質・能力を測定していると考えられている。

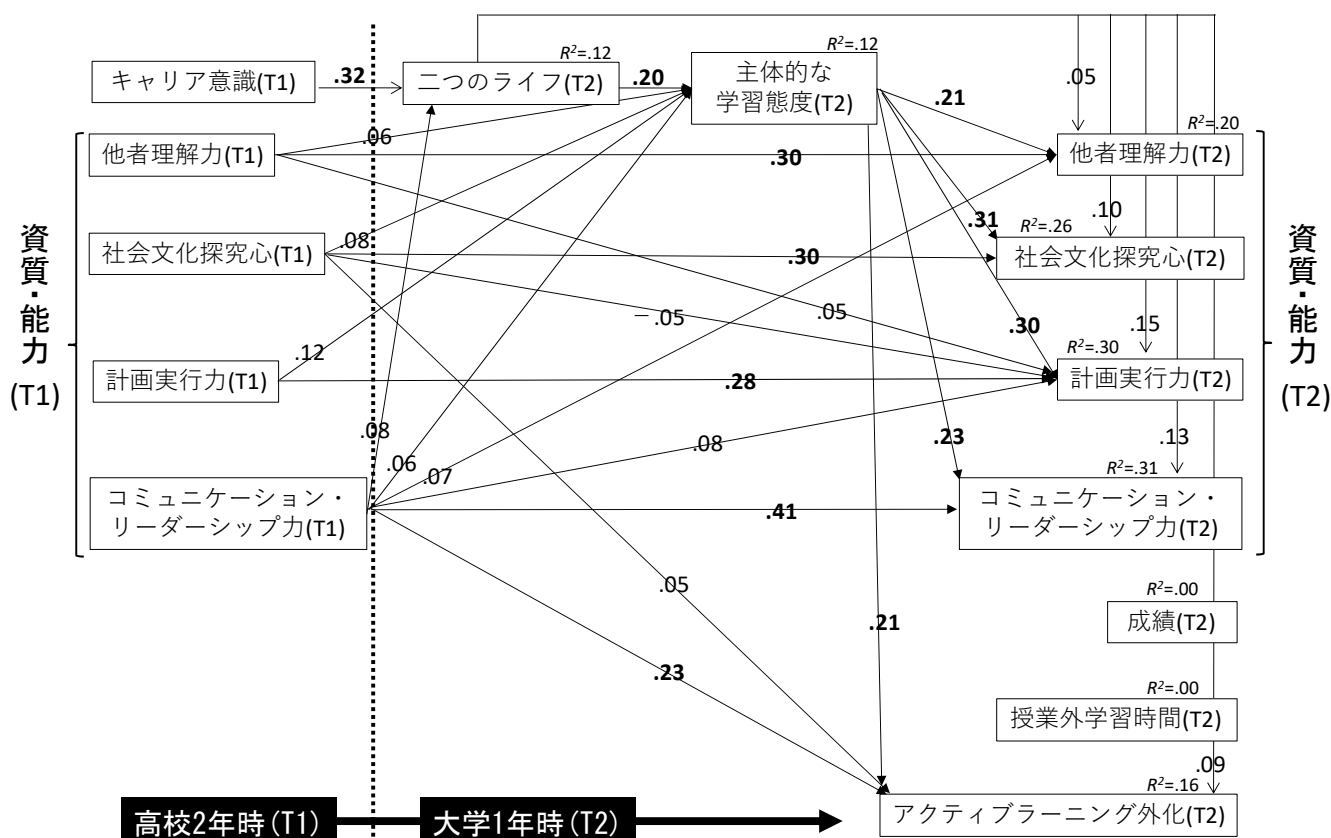
調査項目	PROGテスト		
	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
他者理解力	.342 **	.234 **	.201 **
社会文化探究心	.241 **	.286 **	.382 **
計画実行力	.304 **	.456 **	.477 **
コミュニケーション・リーダーシップ力	.608 **	.496 **	.254 **

** p<.01

*「学校と社会をつなぐ調査」と同じ調査票、ならびに河合塾のPROGテストを2014年12月に高校2年生554名に実施。表は、PROGのなかの「コンピテンシー」の3次元“対人基礎力”“対自己基礎力”“対課題基礎力”の得点との相関関係を示している。

【分析4-2】 総合的に見て、資質・能力(T2)、学習(T2)を説明する変数は結局どれか？

分析1の結果から、大学1年時の資質・能力(T2)が主体的な学習態度(T2)との関連で大きく説明されること、また分析2の結果からは、大学1年時の学習の多くが主体的な学習態度(T2)との関連を持ち、また、その主体的な学習態度(T2)が高校2年時のコミュニケーション・リーダーシップ力(T1)に影響を受けていたり、大学1年時の二つのライフ(T2)との関連で説明されたりすることが明らかとなっている。さらに分析3の結果からは、二つのライフ(T2)は、高校2年時のキャリア意識(T1)に影響を受けていることも明らかとなっている。しかしながら、これらの結果を導いた重回帰分析は、説明変数の相互作用や目的変数の誤差相関を十分に考慮せずおこなったものなので、ここではこれらの変数を一括して扱い、変数間の関係や影響を考慮する構造方程式モデルによって分析をおこなった。なお、扱う変数は、分析1～3の結果で取り上げられた主な変数のみとした。



* $\chi^2(43)=103.617, p<.001, CFI=.996, RMSEA=.017$

*パス係数が.20以上のものを太字にしている。

*誤差項は省略している。また、パス係数はすべて $p<.001$ のため、それを示す記号の記載は省略している。

結果と考察

- ✓ 分析1の結果と同様に、高校2年時における4つの「資質・能力(T1)」は、大学1年時のそれぞれの「資質・能力(T2)」に有意に影響を及ぼしていた(.28～.41)。また、大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」も「資質・能力(T2)」すべてに影響を及ぼしていた(.21～.31)。
- ✓ 分析2の結果と異なり、「主体的な学習態度(T2)」は、成績(T2)、授業外学習時間(T2)に影響を及ぼしていなかった。
- ✓ 分析2の結果と同様に、「主体的な学習態度(T2)」は、高校2年時の「計画実行力(T1)」(.12)よりも、大学1年時の「二つのライフ(T2)」(.20)から影響を受けていた。
- ✓ 分析2の結果と同様に、「アクティブラーニング外化(T2)」は高校2年時の「コミュニケーション・リーダーシップ力(T1)」(.23)と大学1年時の「主体的な学習態度(T2)」(.21)から影響を受けていたが、分析2の結果と異なり、高校2年時の「キャリア意識(T1)」からは直接的な影響を受けていなかった。
- ✓ 分析3の結果と同様に、「二つのライフ(T2)」は高校2年時の「キャリア意識(T1)」(.32)に影響を受けていた。

分析5 高校2年時の生徒タイプ(T1)との関連

1時点目の分析結果で示した「生徒タイプ(T1)」が、大学1年時の資質・能力、学習、キャリア形成にどの程度影響を及ぼしているかを検討する。これによって、高校側に教育・指導の視点を提供することができる。

【参考】1時点目成果報告で示した7つの「生徒タイプ(T1)」の特徴は下記のとおりである。

- (1) **勉学タイプ**: 授業外学習をおこない、キャリア意識が高く、対人関係、自尊感情が良好なタイプ。8割の者は部活動もおこなっている。
- (2) **勉学そこそこタイプ**: 準勉学タイプ。家庭学習の時間が勉学タイプよりもやや短い。
- (3) **部活動タイプ**: 部活動を中心に一週間を過ごし、良好な友だち関係や集団行動に適応しているが、授業外学習はあまりせず、将来のこともあまり考えていないタイプ。
- (4) **交友通信タイプ**: 友だちと遊んだり通信したりすることが生活の中心であり、良好な友だち関係を築いたり集団行動に適応していたりする。授業外学習はあまりしないが、将来のことは比較的よく考えているタイプ。
- (5) **読書マンガ傾向タイプ**: 読書したりマンガ・雑誌を読んだりして、ひとりで過ごす時間が長く、友だち関係は弱く、自尊感情、キャリア意識は低いタイプ。
- (6) **ゲーム傾向タイプ**: ゲームしてひとりで過ごす時間が長く、勉強はしない、友だち関係は弱い、キャリア意識も低いタイプ。
- (7) **行事不参加タイプ**: 友だち関係が弱く、自尊感情の低いことが学校行事への消極的参加につながっていると考えられ、将来のことも考えられていないタイプ。

1時点目のデータから明らかとなったのは、概して、「勉学タイプ」「勉学そこそこタイプ」は学び成長するタイプであり、「読書マンガ傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「行事不参加タイプ」は成長の傾向が弱いタイプだということである。両者の差異は主に、キャリア意識(前者はキャリア意識が高く、後者は低い)、対人関係(前者は対人関係が良好であり、後者は対人関係が弱いか一人の活動を好む)にあると考えられた。



詳しくは、下記を参照のこと。

溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2015). **どんな高校生が大学、社会で成長するのか**—「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ—学事出版

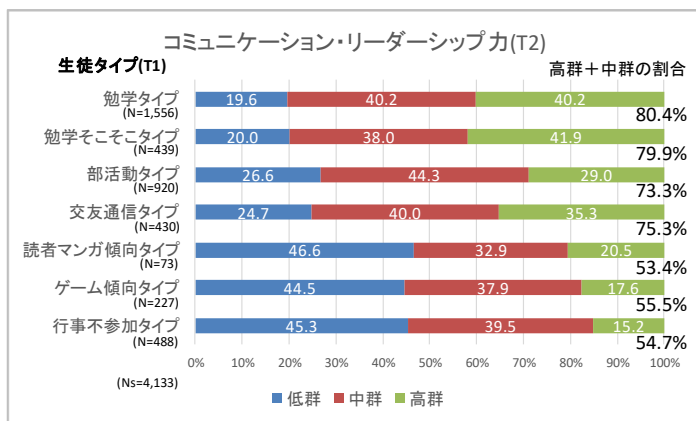
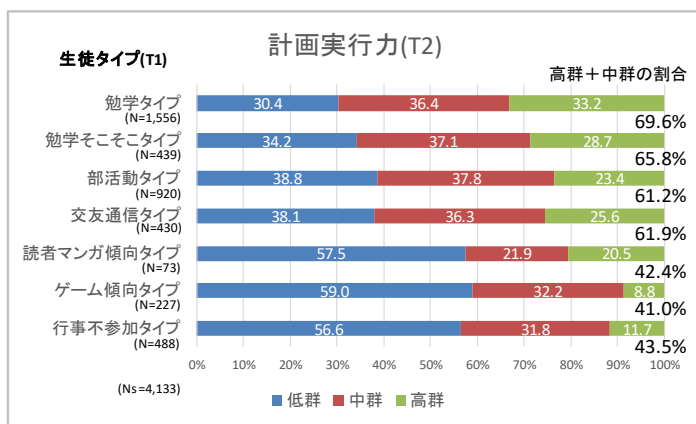
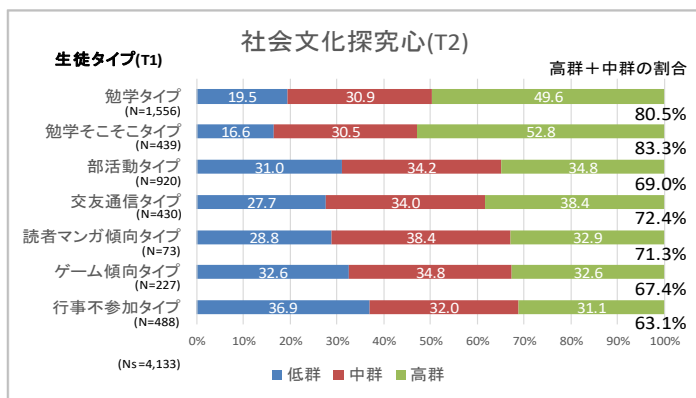
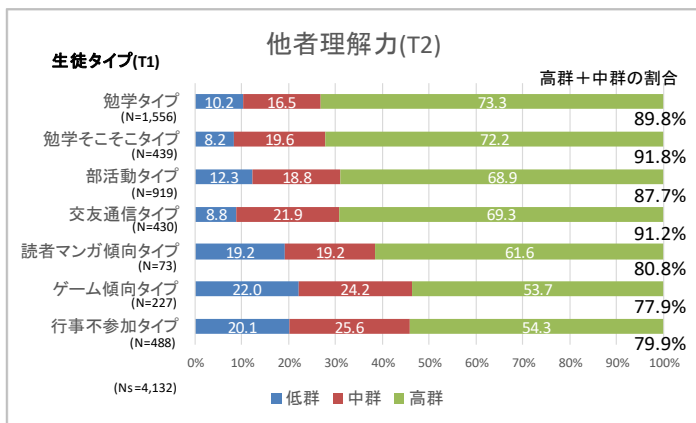
主な結果

- 高校2年時の生徒タイプ(T1)は大学1年時の資質・能力(T2)に影響を及ぼしていた。概して“**勉学タイプ**”“**勉学そこそこタイプ**”の資質・能力(T2)は高く、“**読書マンガ傾向タイプ**”“**ゲーム傾向タイプ**”“**行事不参加タイプ**”の資質・能力(T2)は低かった。
- 大学1年時の「**計画実行力(T2)**」「**コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)**」は発達に難しく、ここに生徒タイプ(T1)による差が表れると考えられた。
- 高校2年時の生徒タイプ(T1)は、成績(T2)、授業外学習時間(T2)、アクティブラーニング外化(T2)、主体的な学習態度(T2)すべての学習変数に影響を及ぼしていた。概して、“**勉学タイプ**”“**勉学そこそこタイプ**”の学習は他の生徒タイプ(T1)に比べて良好であった。
- 高校2年時の生徒タイプ(T1)は、キャリア形成としての二つのライフ(T2)に影響を及ぼしていた。上の結果と同様に、“**勉学タイプ**”“**勉学そこそこタイプ**”の二つのライフ(T2)は他の生徒タイプに比べて良好であった。

(☞分析5-1～5-3を参照)

生徒タイプ(T1) × 資質・能力(T2)

結果と考察



・分析4-1の高中低群を使用して、生徒タイプ(T1) × 資質・能力(T2)の分析をおこなった。

・4つの資質・能力(T2)の到達度を「高群+中群」と見なし、その割合と生徒タイプ(T1)による高低差を右端に記した。その結果は以下の通りであった。

他者理解力(T2) (77.9~91.8%: 高低差13.9%)
社会文化探究心(T2)

(63.1~83.3%: 高低差20.2%)

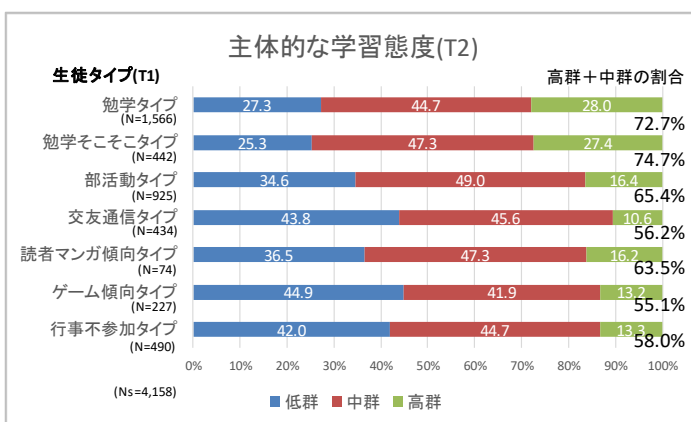
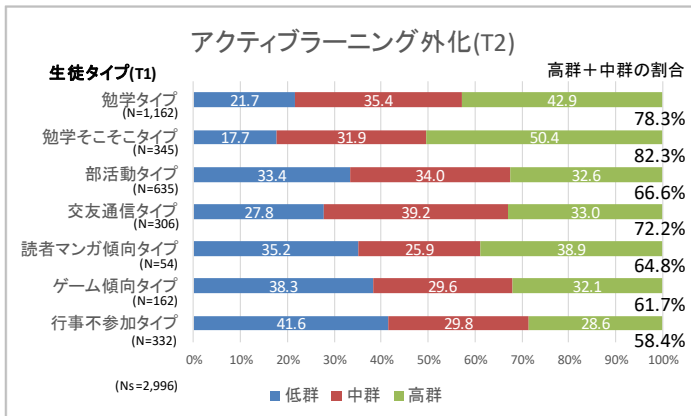
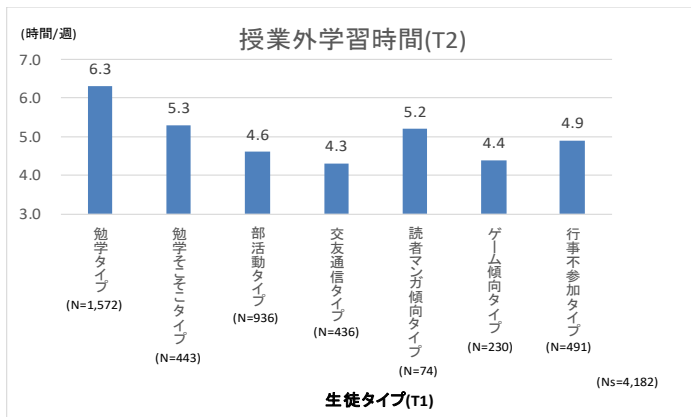
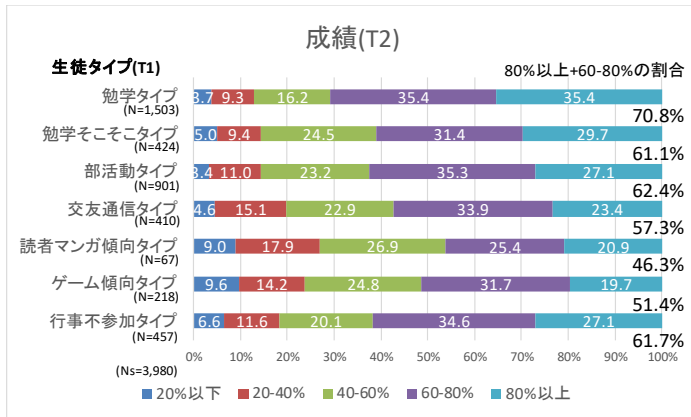
計画実行力(T2) (41.0~69.6%: 高低差28.6%)

コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)

(53.4~80.4%: 高低差27.0%)

・結果から示唆されるのは、

- (1) 高校2年時の生徒タイプ(T1)が概して、大学1年時の資質・能力(T2)に影響を及ぼしていることである。資質・能力の種類によるが、概して、勉強タイプ、勉強そこそこタイプの資質・能力は高く、読者マンガ傾向タイプ、ゲーム傾向タイプ、行事不参加タイプの資質・能力は低いという結果である。
- (2) 生徒タイプ(T1)による高低差は、「他者理解力(T2)」でもっとも小さく(13.9%)、「計画実行力(T2)」(28.6%)、「コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)」(27.0%)でもっとも大きい。この結果は、生徒タイプ(T1)による資質・能力の発達差が、「計画実行力(T2)」「コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)」に顕著に表れることを示唆している。
- (3) 「他者理解力(T2)」は、生徒タイプ(T1)による高低差が小さいだけでなく、すべてのタイプの約8割以上の者が高群か中群に到達している(77.9~91.8%)。それに対して、「計画実行力(T2)」はもっとも到達度の高い勉強タイプでも69.6%であり、ゲーム傾向タイプになると、到達度は41.0%まで落ちる。同様の傾向は「コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)」でも認められる。この結果は、(2)の結果と合わせて、大学生になっての「計画実行力(T2)」と「コミュニケーション・リーダーシップ力(T2)」の発達が難しく、ここに生徒タイプ(T1)による差が顕著に表れることを示唆している。



結果と考察

(1) 成績(T2)について

・「80%以上+60-80%」の割合と生徒タイプ(T1)による高低差を右端に記した。その結果は以下の通りであった。

成績(T2) (46.3~70.8%:高低差24.5%)

・高低差(24.5%)が認められ、生徒タイプ(T1)による差が顕著に認められる。個別で見ると、勉学タイプの「成績(T2)」がもっとも良く(70.8%)、読者マンガ傾向タイプ(46.3%)、ゲーム傾向タイプ(51.4%)の「成績(T2)」が悪かった。行事不参加タイプの「成績(T2)」は良好であった(61.7%)。

(2) 授業外学習時間(T2)について

・単位制の観点から見ると、全体的に「授業外学習時間(T2)」は短いと言わざるを得ないが、それを前提とすれば生徒タイプ(T1)による差が認められる。個別で見ると、勉学タイプ(6.3時間/週)でもっとも長く、交友通信タイプ(4.3時間/週)でもっとも短かった。ゲーム傾向タイプ(4.4時間/週)も短かった。

(3) アクティブラーニング外化(T2)について

・1~4点のレンジを持つ「アクティブラーニング外化(T2)」得点を、中点(2.5点)、得点分布を見ながら、次の全体得点に基づく基準で高中低群に分類した。低群≤2.0点、2.0点<中群<3.0点、3.0点≤高群 この結果、低群(19.8%)、中群(52.4%)、高群(27.9%)となった。

・分析5-1と同様に、「高群+中群」を到達度と見なし、その割合と生徒タイプ(T1)による高低差を右端に記した。その結果は以下の通りであった。

アクティブラーニング外化(T2)

(58.4~82.3%:高低差23.9%)

生徒タイプ(T1)によって到達度が異なり、高低差(23.9%)も認められることから、「アクティブラーニング外化(T2)」は高校2年時の生徒タイプ(T1)に影響を受けていることが示唆される。個別で見ると、勉学そこそこタイプ(82.3%)、勉学タイプ(78.3%)でもっとも割合が高く、行事不参加タイプ(58.4%)、ゲーム傾向タイプ(61.7%)でもっとも割合が低かった。

(4) 主体的な学習態度(T2)について

・1~5点のレンジを持つ「主体的な学習態度(T2)」得点を、中点(3点)、得点分布を見ながら次の絶対得点による基準で高中低群に分類した。低群≤3.0点、3.0点<中群<4.0点、4.0点≤高群

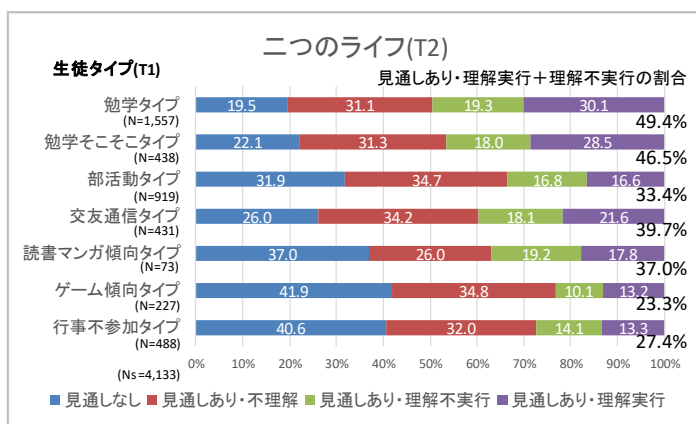
・分析5-1と同様に、「高群+中群」を到達度と見なし、その割合と生徒タイプ(T1)による高低差を右端に記した。その結果は以下の通りであった。

主体的な学習態度(T2)

(55.1~74.7%:高低差19.6%)

生徒タイプ(T1)によって到達度が異なり、高低差

(19.6%)もある程度認められることから、「主体的な学習態度(T2)」は高校2年時の生徒タイプ(T1)に影響を受けていることが示唆される。個別で見ると、勉学そこそこタイプでもっとも割合が高く(74.7%)、ゲーム傾向タイプ(55.1%)でもっとも割合が低かった。



結果と考察

・「二つのライフ(T2)」をキャリア形成の変数として取り上げ、「見通しあり・理解実行+理解不実行」の割合と生徒タイプ(T1)による高低差を右端に記した。その結果は以下の通りであった。

二つのライフ(T2) (23.3~49.4%:
高低差26.1%)

・全体的に割合は低く、高低差(26.1%)もかなり認められる。この結果は、「二つのライフ(T2)」は高校2年時の生徒タイプ(T1)に影響を受けていることを示唆している。個別に見ると、勉強タイプでもっとも割合が高く(49.4%)、ゲーム傾向タイプ(23.3%)でもっとも割合が低かった。

付録：使用変数の説明

● 資質・能力(T1, T2)

資質・能力に関する18項目を下記のとおり尋ねた。

「最近のあなたをふり返って、下記の事柄がどの程度身についたと感じますか」(5件法)

- | | |
|---|-------------------------------|
| (1) 計画や目標を立てて日々を過ごすことができる | (10) 時間を有効に使うことができる |
| (2) 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる | (11) 新しいアイデアを得たり発見したりすることができる |
| (3) リーダーシップをとることができる | (12) 困難なことでもチャレンジすることができる |
| (4) 図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる | (13) 人の話を聞くことができる |
| (5) 他の人と議論することができる | (14) 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる |
| (6) 自分の言葉で文章を書くことができる | (15) 人に対して思いやりを持つことができる |
| (7) 人前で発表をすることができる | (16) 忍耐強く物事に取り組むことができる |
| (8) 他の人と協力して物事に取り組める | (17) 異文化や世界に関心を持つことができる |
| (9) コンピュータやインターネットを操作することができる | (18) 自分を客観的に理解することができる |

本研究では、因子分析の結果を見て4因子で整理し、因子負荷の高い項目を用いて加算平均をし分析をおこなった。

*T1 /2の順で示す。以下同様

- | | |
|---|---|
| (1) 他者理解力：項目(13)(14)(15)の加算平均。α=.77 / .80* | *項目(9)(11)(18)は因子分析の結果、因子負荷量が低く、分析から除外している。 |
| (2) 社会文化探究心：項目(2)(4)(17)の加算平均。α=.61 / .54 | |
| (3) 計画実行力：項目(1)(10)(12)(16)の加算平均。α=.77 / .76 | |
| (4) コミュニケーション・リーダーシップ力：項目(3)(5)(6)(7)(8)の加算平均。α=.81 / .79 | |

● 成績(T2)

「あなたの成績は平均してどれくらいですか。もっとも近い番号を1つ選んでください。」

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| (6) 履修した科目の80%以上が優(80点以上)の成績である | (3) 履修した科目の20~40%未満が優(80点以上)の成績である |
| (5) 履修した科目の60~80%未満が優(80点以上)の成績である | (2) 履修した科目の20%以下が優(80点以上)の成績である |
| (4) 履修した科目の40~60%未満が優(80点以上)の成績である | (1) その他(わからない、覚えていない、など) |

本研究では、(1)を欠損値として処理して分析をおこなった。

● 主体的な学習態度(T2)

「以下のそれぞれの項目内容は、あなたにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選んで、数字に○をつけてください。」(5件法)

*授業や場合によって変わるかもしれませんが、「一般的にこの程度」という感覚でお答えください。

*課題、プレゼンテーション、レポートの経験がない方は、「出されたらどのように取り組むか」ということを想定してお答えください。

- (1) レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い*
- (2) レポートは満足がいくように仕上げる
- (3) 授業には意欲的に取り組む
- (4) 課題には最小限の努力で取り組んだ*
- (5) 単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る*
- (6) 課題は納得いくまで取り組む
- (7) 課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する
- (8) 授業はただぼうっと聞いている*
- (9) プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫のように十分に調べる

本研究では、逆転項目(*)を反転させて、加算平均して分析をおこなった。α=.85

● アクティブラーニング外化(T2)

「大学(短大・専門学校)で、話し合いや発表のある授業に対して、以下の項目のような態度をどの程度とっていましたか。それぞれの項目について、もっとも近い選択肢を1つ選んでください。」(4件法)

*そういう授業が全くなかった人は、「あてはまらない」を選んでください。

- (1) 議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す
- (2) 根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う
- (3) クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える

本研究では、加算平均して分析をおこなった。α=.84

【出典】

畑野快・溝上慎一(2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討 日本教育工学会論文誌, 37(1), 13-21.

で開発した「主体的な授業態度」尺度を、畑野(2013)にならって、「主体的な学習態度」尺度と名称を変えて使用している。

畑野快(2013). 大学生の内発的動機づけが自己調整学習方略を媒介して主体的な学習態度に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 81-84.

● 二つのライフ(T2)

Q1「あなたは、自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っていますか。」

- (1) 持っている
- (2) 持っていない

Q2「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか。またそれを実行していますか。最もあてはまるものを1つお知らせください。」

- (1) 何をすべきか分かっているし、実行もしている
- (2) 何をすべきかは分かっているが、実行はできていない
- (3) 何をすべきかはまだ分からない

Q1、Q2の回答より、

- (4) 見通しあり・理解実行(Q1の(1)+Q2の(1)) →(3)
- (3) 見通しあり・理解不実行(Q1の(1)+Q2の(2)) →(2)
- (2) 見通しあり・不理解(Q1の(1)+Q2の(3)) →(2)
- (1) 見通しなし(Q1の(2)) →(1)

のステイタスを作成し、それを(3)(2)(1)に再分類して得点化し、分析をおこなった。

【出典】

二つのライフの説明、ステイタス、再分類・得点化については下記の文献を参照のこと。

保田江美・溝上慎一(2014). 初期キャリア以降の探究―「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究―大学から企業へのトランジション― 東京大学出版会 pp.139-173.

● 社会階層(T1.5)

父の学歴、母の学歴、世帯年収の3変数の得点を標準化して、加算平均し、(3) 高、(2) 中、(1) 低 と分類した。いずれかの変数が欠損だった場合には、2変数を用いて同様に加算平均した。

①あなたのご両親(またはそれにかわる方)の最終学歴をおたずねします。あてはまる番号を下の空欄に記入してください。

- | | | |
|---|-------------|-------------------|
| (1) 中学まで | (4) 短大や高専まで | (7) 不明 |
| (2) 高校まで | (5) 大学まで | (8) いない |
| (3) 専修学校や各種学校(料理、コンピュータ、洋裁、デザイン、美容師などの学校)まで | (6) 大学院まで | * (7)(8)は欠損値として処理 |

A. お父さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

B. お母さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

②あなたが高校を卒業した頃のご家族全体の収入は次の中のどれに近いですか。

* あなた以外のご家族について、臨時収入、副収入、年金、株式配当などすべての収入を合わせた額(税や保険料などを差し引く前の額)をお答えください。

- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------------|-----------------|
| (1) 200万円未満 | (5) 500～600万円未満 | (9) 900～1,000万円未満 | (13) 分からない |
| (2) 200～300万円未満 | (6) 600～700万円未満 | (10) 1,000～1,200万円未満 | |
| (3) 300～400万円未満 | (7) 700～800万円未満 | (11) 1,200～1,500万円未満 | |
| (4) 400～500万円未満 | (8) 800～900万円未満 | (12) 1,500万円以上 | * (13)は欠損値として処理 |

● 都市度(T1)

在籍高校の所在地より、高校生の生活空間としての4分類をおこない

- (1) 三大都市圏(東京都、神奈川などの全域、京都市、大阪府全域など)
- (2) 地方中枢都市圏(札幌市、広島市、福岡市など)
- (3) 地方中枢拠点都市圏(旭川市、高崎市、長野市、倉敷市など)
- (4) その他の地方都市(岩見沢市、敦賀市、出雲市など)

本研究では、(2)(3)(4)が分化した特徴を示さなかった一次分析の結果を受けて、(1) 三大都市圏 (0) それ以外 に再分類して最終的な分析をおこなった。

【出典】

都市度の分類に関しては、下記の第4章(柏木智子)を参照のこと。

溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2015). どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ― 学事出版

● 中高一貫校(T1)

「あなたは中高一貫教育(あるいは小中高一貫教育)で学ぶ生徒ですか。」

- (1) はい (2) そうだが、この学校で学ぶのは高校からだ (3) いいえ (4) よくわからない

本研究では、(1) 中高一貫校 (0) それ以外 に再分類して分析をおこなった。

● SSH経験(T1)

「あなたはSSH(スーパーサイエンスハイスクール)のプログラム(あるいはそれに類似する学校独自のサイエンスプログラム)に参加していますか。」

- (1) 参加している(した)し、満足している(満足した)
- (2) 参加している(した)が、あまり満足していない(満足しなかった)
- (3) 参加していない/知らない

本研究では、(1) SSH受講&満足 (0) それ以外 に再分類して分析をおこなった。

● 高校の大学進学程度(T1)

河合塾の進学資料を用いて、所属する高校を以下のいずれかに分類した。

- (3) 難関国公立大・私立大に多数進学
- (2) 中堅国公立大・私立大に多数進学
- (1) その他の私立大・短大に多数進学

● 一週間の活動時間(T1)

「最近の典型的な(1) 平日(月～金曜日)、(2) 休日(土・日曜日)の過ごし方を、右の表を完成させて教えてください。」

*曜日によって過ごし方は異なると思いますが(たとえば、部活動は週2回で、部活動のある曜日とない曜日とでは過ごし方が異なる場合)、あなたを理解するためのもっとも典型的な過ごし方を教えてください(たとえば、部活動があなたにとって重要であれば、部活動のある日の一般的な過ごし方を記入する、など)。」

No	活動内容	記入例	(1) 平日	(2) 休日
1	部活動	3 時間	時間	時間
2	学校での授業以外の学習時間 (授業に関連した宿題や課題、授業に関連しない自主学習、並や予備校、家庭教師、自主学習など、あらゆる勉強を含みます)	1 時間	時間	時間
3	友達と遊ぶ	時間	時間	時間
4	テレビを見る	1.5 時間	時間	時間
5	友達と電話、LINE、メール交換、SNS(mixiやGREE、Mobage、Facebookなど)などをする	2 時間	時間	時間
6	ゲームをする	時間	時間	時間
7	読書をする (ただし、マンガ、雑誌を除く)	時間	時間	時間
8	マンガ、雑誌を読む	0.5 時間	時間	時間
9	睡眠	6 時間	時間	時間
10	その他1()	時間	時間	時間
11	その他2()	時間	時間	時間
12	その他3()	時間	時間	時間

*記入例を参考にして0.5時間(30分)単位で記入してください。

*縦の合計が、学校での授業時間(7～8時間)を含めて24時間を越えないように注意してください。

【出典】

- ・Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- ・桜井茂男 (1997). 現代に生きる若者たちの心理—嗜癖・性格・動機づけ— 風間書房

● 自尊感情(T1)

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度(櫻井, 1997訳) 10項目のなかから以下の6項目を使用、加算平均して分析をおこなった。 $\alpha=.69$

「以下の項目を読んで、自分の気持ちにもっとも近い番号に○をつけてください。」(4件法)

- (1) 私は、自分に満足している
- (2) 私は、自分には見どころがあると思う
- (3) 私はたいいていのがやれる程度には物事ができる
- (4) 私には得意に思うことがない(*)
- (5) もう少し自分を尊敬できたらと思う(*)
- (6) 私は自分自身に対して、前向きな態度をとっている *逆転項目

● 対人関係(T1)

以下の2項目を加算平均して、分析をおこなった。 $\alpha=.69$

「友だち関係についてお尋ねします。もっとも近い番号に○をつけてください。」(5件法)

- (1) 友だちをたくさん作るように心がけている
- (2) 初対面のひととでもすぐに友だちになる

● キャリア意識(T1)

以下の3項目を加算平均して、分析をおこなった。 $\alpha=.67$

高校卒業後、大学や短大、専門学校などに進学すると回答した者に対して、

- (1) どのような進学先(どの大学、どの学部、どの専門学校など)にするか、どの程度考えていますか。
(4: よく考えている～1: 考えていない の4件法)
- (2) 進学準備(受験勉強の開始、進学先に関する本や雑誌を読むなど)を始めていますか。
(4: すでに始めている 3: 最近始めたところだ 2: 始めようと思っているが始めていない 1: 始めていない の4件法)
- (3) 進学先(大学や短大、専門学校など)を卒業した後、どのような職業に就きたいか、どのような仕事をしたいか、その見通しをどの程度持っていますか。
(4: かなり持っている～1: まったく持っていない の4件法)

● **地域移動(T1.5)**

「高校を卒業されたとき、あなたはどこにお住まいでしたか。都道府県名と市名(市ではない場合は町村名)を具体的にお答えください。」

[]都道府県 []市(あるいは町村)

「現在のあなたの住所は、さきほどお尋ねした高校卒業時の住所と同じですか。もし違っていたら、都道府県名と市名(市ではない場合は町村名)を具体的にお答えください。」

(1) 同じ

(2) 違う []都道府県 []市(あるいは町村)

【出典】1995年SSM調査A票

本研究では、(1) 違う(→移動あり) (0) 同じ(→移動なし) と再分類して分析をおこなった。

● **国公立大学(T1.5)**

「現在在籍している大学は、国立ですか、公立ですか、私立ですか。」

(1) 国立 (2) 公立 (3) 私立

本研究では、(1) 国公立 (0) 私立 と再分類して分析をおこなった。

● **大学偏差値(T1.5)**

現在在籍している大学

河合塾の「入試難易ランキング予想表」(<http://www.keinet.ne.jp/rank/index.html>)を参考にして

(5) 偏差値65以上 (2) 偏差値40-49
 (4) 偏差値60-64 (1) 偏差値39以下
 (3) 偏差値50-59 (0) 不明

に分類した。本研究では、度数の関係から(1)と(2)を合算して、(2) 偏差値49以下 として分析をおこなった。
 (0) 不明 は欠損値として処理した。

● **学部学科(T1.5)**

「学部・学科の種類は何ですか。もっとも近い番号を選んでください。」

- (1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)
- (2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)
- (3) 理科系(理学・工学・農学など)
- (4) 芸術系(美術・音楽・デザイン学など)
- (5) (1)~(4)以外の文科系でもあり理科系でもある
- (6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)
- (7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)
- (8) その他()

本研究では、(4)と(5)と(8)を合算して(8) その他とし、

- (1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)
- (2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)
- (3) 理科系(理学・工学・農学など)
- (6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)
- (7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)
- (8) その他

とカテゴリーを整理したうえで、(1) 人文科学系 を基準として、

社会科学系ダミー、理科系ダミー、4年制医療系ダミー、6年制医療系ダミー、その他ダミー

を作成して分析をおこなった。

● **(大学生の)一週間の生活(T2)**

「一週間の生活を振り返って、あなたは次の活動にどれくらいの時間を費やしていますか。一週間の平均的な時間数を記入例を参考にして記入してください。」

【出典】

京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2013』調査票
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/investigation/about/>

No	活動内容	記入例	
1	授業や実験に参加する	15 時間	時間
2	授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする	5 時間	時間
3	授業とは関係のない勉強を自主的にする	0 時間	時間
4	友達と会う、遊ぶ	5 時間	時間
5	クラブ・サークル活動をする	12 時間	時間
6	コンパや懇親会などに参加する	3 時間	時間
7	アルバイトをする	8 時間	時間
8	社会貢献活動をする(ボランティアやNPOの活動など)	0 時間	時間
9	テレビを見る	20 時間	時間
10	電話、LINE、メール交換、SNS(mixiやFacebookなど)をする	14 時間	時間
11	インターネットサーフィンをする	7 時間	時間
12	ゲーム(ゲーム機・コンピューターゲーム・オンラインゲーム)をする	0 時間	時間
13	勉強のための本(新書や専門書など)を読む	0 時間	時間
14	娯楽のための本(小説・一般書など、マンガや雑誌を除く)を読む	3 時間	時間
15	マンガや雑誌を読む	5 時間	時間
16	新聞を読む	0 時間	時間
17	通学にかかる時間	10 時間	時間

プロジェクト組織

- 調査企画・分析:

溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター 教授)

- 分析協力者:

柏木智子(大手前大学総合文化学部 准教授)

伊佐夏実(宝塚大学造形芸術学部 専任講師)

知念 渉(大阪大学大学院人間科学研究科 助教)

畑野 快(大阪府立大学高等教育開発センター 特認助教)

河井 亨(立命館大学教育開発推進機構 講師)

椋本 洋(学校法人追手門学院 教育特別顧問)

- 調査実施や事務管理等:

学校法人河合塾 教育イノベーション本部 ※2016年8月現在、五十音順

赤塚 和繁(教育研究部)

石鍋 京子(教育研究部)

伊藤 寛之(教育研究部 チーフ)

片山 まゆみ(教育研究部)

近藤 宏樹(教育研究部)

高井 靖雄(教育研究部 統括チーフ)

山本 康二(教育研究部 部長)

「学校と社会をつなぐ調査」2時点目成果報告書(ダイジェスト版)

2016年(平成28年)9月

編集・発行: 京都大学高等教育研究開発推進センター・学校法人河合塾

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 京都大学高等教育研究開発推進センター

TEL 075-753-3047 (溝上研究室) E-mail mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-49-7 池袋パークビル 6階

河合塾教育イノベーション本部教育研究部

TEL 03-6811-5531 E-mail kkt@kawai-juku.ac.jp

<http://www.kawai-juku.ac.jp/research/sch/>

*無断転載を禁じます。